

垣根をかき分けて歩いた獣道に少年がいた。一人佇む孤独感を醸し出していた。ひよつとすると、寂しいのかもしれない。だから声をかけた。

——どうしたの？ 辛いことでもあった？

私の声が届いてないらしく少年は地面を見ていた。少年の声も聞こえず、風の音だけが聞こえた。

星を見ているらしく、地面に映っていた。よく見ると水面に月が輝いていた。川が近くで流れていたことに気付く。

空はまだ、暗い。いずれ星に映るだろう。でも、それでいい。

星屑に見たい景色があったわけではない。でも、それでいい。

少年はゆっくりと空を見上げた。何もないと呟いて。

私は特に声をかけることなく、見つめていた。少年は探し物だろうか。

——なにかあったの？ こえ、聞こえる？

それは思いつくの中から聞こえる声でもある。少年が探しているものはなんだろうと考える。でも、何もわからない。

当たり前だ。少年は前からそこにいるということなんだから。ずっと知っていた友達とかじゃないから。

でも、それでも、一つだけわかることがある。

それは、私もひとりだということだった。

だから、少年と一緒になんだと、勝手に理解して苦笑する。そんな自分の慰め方はないんじゃないかと、思わずにはいられない。

もし、少年に笑顔が取り戻されたら、と昔のあいつに投影する。ひとつ、またひとつ、前に進もう。

あの日を信じて、あいつと一緒に歩いていたあの頃に戻れることが出来たらと、そんな想いで、少年を見続けた。